

保育系学生を対象とする英語翻訳指導と
異文化理解教育統合の試み⁽¹⁾

小 宮 富 子
岡崎女子短期大学

Abstract

The introduction of 'Creative Translation of English Picture Books', which is a process of creating semi-original literary works from the originals, is a trial to activate the EFL class through integration of learning English, cross-cultural understanding and professional interest of students. As Dr. Widdowson remarked, teachers must help connect written texts to learners' 'realities'. I believe that English picture books could be both attractive learning and teaching materials for Early Education majors in colleges or universities.

キーワード：英語絵本の創作翻訳、英語教育、異文化理解、保育系学生

Keywords: creative translation of English picture books, English education, cross-cultural communication, early education majors

0. はじめに

短期大学保育系学生を対象とした英語翻訳指導と異文化理解教育を統合する方策として、英語 reading 授業における英語絵本の創作翻訳導入を試みた。⁽²⁾ 学生の専門性にも配慮した一種の「体験学習」的課題を学生に与え、日英語の文体やレトリックの相違に関する言語的分析、及び、題材に反映する異文化要素の分析を課すことにより、英語学習への動機付けを高めると同時に、ESP・日英語の対照言語学的学習・異文化理解学習の統合を目指した。本稿は保育系学生対象の reading 指導における英語絵本創作翻訳導入の多面的有効性を論じるものである。

1. 授業活性化の諸要因

読解教材の選択と活用法に関し、Dr. Henry Widdowson は 2002 年 11 月に日本各地で行なった講演会（大学英語教育学会・Oxford University Press 共催）にて次のよ

うに語っている。

EFL teachers must think about types of written texts that should be presented in class, consider how texts should be selected and, or specially designed, and what kind of activities texts should be associated with to make them effective for learning.” (H. Widdowson, 2002)

また、「読解教材を学生自身の ‘realities’ に結びつけることに教師の役割がある」とする氏の主張も説得力を持つものであった。⁽³⁾

以下、教材選択と教材利用における一般的留意点、及び教材を学生の realities と結びつけるための授業活性化要因と筆者が考えるものを挙げ、その見地から見た英語絵本の教材的価値に触れておきたい。

1) 教材選択

① 内容的魅力

断片的情報の組み合わせから成る英語テキストの多くは、編者の工夫にも関わらず、教材としての魅力に欠け、再読の意欲を満たし得ない。その点、作者の感性や世界観をも含み、造形的芸術性を備えた英語絵本は完成された総合芸術作品であり、教材としても立体的な魅力を持ち得る。

② 学習者の英語読解レベルへの配慮

乳児を対象としたものから成人を対象としたものまで英語絵本の読解難易度は多様である。英語教材としての一定の質的量的基準を満たす絵本の中から、学習者の個別能力に応じたテキストの選択が可能となる。

③ 学習者の適性や専門領域への配慮

保育系学生にとって絵本は使い慣れた教材でもある。簡易絵本の制作や発表展示などを通じた学生の専門領域との関連付けにより、英語学習への動機付けが可能となる。

2) 授業活性化の要因

① 明確な学習目標の設定

地道で継続的な努力を要する外国語学習の途上で具体的な学習目標を見失う学生は極めて多い。強い学習意欲と意志を必ずしも持たない一般学生にとって外国語学習は達成感の得難い教科でもある。英語絵本を完訳し発表展示すると

いう具体的学習目標の設定は学習プロセスを意味付け、達成感を与える一助となる。

② 主体的能動的関与への配慮

絵本の創作翻訳では原則として学生自身が教材を選択し、自己の感性や主観性を働かせた翻訳作業が求められる。能動性を引き出す仕組みを用意することは授業活性化の重要な要因である。

③ 対立要素の同時的共存

授業の中に様々な対立要素を同時的に共存させることは授業活性化の最重要ポイントと思われる。「知性」と同時に「感性」に働きかける工夫、「抽象」概念の「具体」的事例による裏づけ（及び「具体」の「抽象」への一般化）、「知的静的」作業と「身体的動的」作業の組み合わせ、「個人」活動と「集団」活動の組み合わせ、「目標」と「プロセス」の相互参照 etc.など、対立要素が教室の中で同時的に活性化される場を作ることは学生の意欲と集中力を高める上での不可欠要件であると筆者は考える。絵本の創作翻訳では指導プロセスにおいて特にこれらへの配慮をおこなった。

2. 指導対象・指導時期

指導対象は短期大学保育系学科所属1年生25名であり、英語4技能の習得を目的とする通常の英語指導と並行する形式で、2001年度通年科目「英語」後期授業の一部を用いて指導をおこなった。

3. 絵本の創作翻訳指導の4段階

「英語絵本の創作翻訳」は、英語授業の中で学生の専門性と異文化理解教育の統合を試みるものであるが、主に4つの指導段階から成立する。

1. 英語絵本の創作翻訳
2. 簡易絵本の制作
3. 言語的・文化的考察
4. 発表と展示

1は主として英語の翻訳作業、2は絵本製作という造形的作業、3は日英語の対照比較や異文化理解に関する分析作業、4は完成作品の展示・発表作業である。以下にその具体的手順を詳述する。

1) 英語絵本の創作翻訳

① 学生による英語絵本の選択

教材としての英語絵本の選択には慎重な配慮を要する。英語読解学習教材としての質的量的要求をある程度満たしうるものであること。また、子どもにとって魅力的であり、子どもの、あるいは学生自身の異文化理解に役立つ内容をもつ絵本の選択が推奨される。教材選択は学生自身が行い、教師は助言と確認を行なう。

② 逐語的訳出

原文を正確に理解したことを確認するための客観的な逐語訳を課す。必要に応じて教師が助言しつつ、複数回に分割した逐語訳レポートの提出を課し、誤訳箇所教師による訂正などを行なう。レポートは reading の評価対象となる。

③ 創作翻訳

創作翻訳の段階では②での逐語訳を離れて、原文の魅力を十分に引き出すための自由な翻訳を行なう。これは学生にとって「子どもの心を捉える魅力ある言葉」をさがす作業である。必要に応じて原文中の要素を削除しても、言葉や情報を付加しても、また置き換えても構わないという指示が学生には与えられる。「創作翻訳と言われても最初は戸惑ってしまった。しかし、自分が 5 歳の子どもに戻ったかのような感覚をイメージした途端に言葉が流れ出てきて夢中になることができた」とある学生は語っている。選択した絵本の対象年齢や実際に読み聞かせる場面をイメージすることにより学生の感性が動きはじめ、そこから自然な日本語が生まれてくるという事実は重要である。

英語上級者や翻訳家が原文の細部を十分に踏まえた上で、それを生かす形で自然な日本語訳を生み出すのに対し、筆者が意図したのはむしろ学生に原文を忘れさせることであつた。逐語訳の呪縛から逃れられない学生があまりに多いためである。原作者の「言葉」よりも「気持ち」に忠実な絵本をつくること、客観性よりも主観性を大切にすること、何よりも読者である子ども達を惹きつける絵本を作ること、が与えられた条件であつた。「創作翻訳」とは作者の領域に侵入し、独自の表現や解釈を通して新しい絵本を作りなおす作業の意でもある。

④ グループによる批評

3～4名の小グループで互いの創作翻訳を批評しあう。出された助言を参考に訳語の修正を行ない、最終原稿を完成する。

2) 簡易絵本の制作

第2段階は「手作り簡易絵本」を制作する造形的課題である。制作作業はすべて自宅学習とし、英語授業では取り扱わないこととしたが、保育系学生の本領を發揮した予想外の力作が多数提出された。

3) 言語的・文化的考察

第3の段階は、言語的・文化的な分析である。主観性に基づいた創作訳をあらためて客観的に分析させる作業は、無意識的作業を意識化させると同時に、異文化要素を考察させるプロセスとしても指導上不可欠な手順である。以下に概略を示すが、分析例の詳細は次節4で取扱う。

① 日英語の対照分析

英語絵本の原文と創作翻訳を対照し、自作の翻訳においてどのような言語的省略・付加・置換がおこなわれたかを分析させ、その理由を考察させる。また、日英語の語彙・統語法・発想の違いなどに関する基礎的情報を与える。

② 市販の翻訳書との比較

同一作品の翻訳ですでに市販されているものがある場合には、自作の創作翻訳との比較をおこない、翻訳家の工夫をたどる。また、翻訳の一般的手順を概観し、翻訳上の困難点や留意点を解説指導する。

③ 異文化要素の対照分析

英語絵本で扱われている題材・概念・事物の中で、日本の事情と異なる文化的要素を含むと思われるものを取り上げさせる。同時に、幼稚園児・保育園児への異文化理解指導教材としての絵本の有用性も検討する。異文化理解教育が求められている現代的理由や異文化理解教育の目的などに関する基礎的情報を学生に与えることも重要である。⁽⁴⁾

④ レポート提出

絵本の印象、翻訳上の工夫と困難点、日英語の対照分析、異文化要素の分析などに関するレポート提出を課す。

4) 発表と展示

完成した創作翻訳は、1度目はクラスメートに対して、2度目は幼児教育学科主催

の「幼児教育祭」にて発表・展示される。

不特定多数者の前に作品を展示するという目標が学生の英語 reading への強い動機付けとなったことは特筆すべきである。具体的目標が具体的ビジョンを学習者に与え、学習過程を意味付けて授業活性化に直結した点に「目標」と「過程」の相互作用を感じ取ることができる。

① 口頭発表

クラスメートを対象に手作り翻訳絵本の「読み聞かせ」をおこない、原作の魅力・訳出上の工夫点や、言語的・文化的対照分析結果に関する口頭発表をおこなう。また、創作翻訳絵本の保育現場での活用方法についても議論する。

② 「幼児教育祭」への出品と幼児を対象とした「読み聞かせ」

筆者が勤務する短期大学では例年 2 月上旬に幼児教育学専攻生の学習成果を発表する「幼児教育祭」が開催される。大学を地域に開放して行なわれる発表や展示、演劇などへの評価は高く、2 日間に約 2000 名の親子が来学する人気行事となっている。「英語」の授業からも原作絵本と創作翻訳絵本を並べて展示し、リクエストに応じて子どもへの読み聞かせを行なうこととした。自作の翻訳を披露し、子ども達の直接的な反応に触れることは学生にとっても達成感を伴う貴重な経験となった。

4. 言語的対照分析

英語の原文と創作訳を対照させる際には、言語学的用語は多用せず、魅力的な訳文を作るために自分が 1. 何を省略し、2. 何を追加し、3. 何を置き換え、4. どんな工夫をしたのか、を学生に具体的に記述させることとした。個々の無意識的な訳出操作を意識化させ、日英語比較の観点からその意味を考えさせる狙いである。学生のレポートや口頭発表で挙げられた代表的記述を整理したものが以下である。

1) 日英語の統語的相違について

- ・ 主語を訳したとたんにな不自然な翻訳調になった。
- ・ 日本語には主語は不要である。

2) 日本語のジェンダーについて

- ・ 日本語の口語表現には性別による区別があるために話者の明示が不必要となることが多い。
- ・ たった 2 ページ 14 行の英文中に 'said (someone)' が 10 回も現れるのに対し、日本語版では「～と言いました」をすべて省略した。

- 3) 情報の削減・追加
 - ・重要でない情報（人称代名詞など）は省略した。
 - ・原文では魅力的な「繰り返し」表現が訳出すると冗長になるため、意味よりもリズムを重視して書き換えた。
 - ・原文にない説明や観察を補足した。
- 4) 情報の焦点化の相違
 - ・主節＋従節の順に並んでいる時、逐語訳では後ろから前に訳したが、それでは意味の焦点がズレることに気づいた。構文よりも意味を重視して前から後ろに訳すことにした。
- 5) 文体の相違
 - ・説明文を会話文に置き換えた
 - ・manを「おじさん」と訳すなど、中立的な英文を子ども言葉に置き換えた。
 - ・擬態語・擬音語を多用した。
 - ・地域方言を使って訳出した。
- 6) 視点や感情移入に関するもの
 - ・登場人物達の性格を設定し、それに応じたセリフを工夫した。（読み聞かせ方にも配慮した）
 - ・原文では中立的な視点からのストーリー展開になっていたが、特定の登場人物の視点からの語りに変更した。
 - ・登場人物の心の動きを言語化した。
 - ・登場する動物に性別をつけた。
 - ・登場人物に任意の名前をつけた。
- 7) 読解上の困難点
 - ・倒置法が多用される詩的な英文の読解に苦勞した。
 - ・文の途中でも行の最初にくる語が大文字表記となっており、文の区切りが理解しづらく困った。
- 8) 翻訳不可能なもの
 - ・韻を踏んだ表現は翻訳不可能であった。
 - ・語呂合わせや駄洒落を訳出できなかった。
 - ・原文のリズムの翻訳が困難だった
 - ・現実と空想、事実と虚偽の境界が不明瞭なシュールな内容についていけなく

なった。

9) その他の工夫

- ・ 想定した対象年齢に応じた言葉使いを工夫した。
- ・ 印字の大きさを変えて視覚的効果を出した。

10) 市販の訳本と自己の翻訳との比較

- ・ 表現の上手さに敬服した。
- ・ 解釈に相違があった。

子どもにとって「魅力的な」翻訳を作るという課題に対し、多くの学生は簡潔で張りのある表現を選択して概ね成功していたが、いくつかの問題点も見られた。分かりやすさを意図するあまりプロットの説明に偏り、原文の味わいを活かしきれなかった作品、感覚的な表現に頼りすぎて粗雑な印象を与える作品、などである。学生が切り捨てた部分の中にも原作者の鋭い現実認識が含まれていたことを指摘し、反省課題とした。

5. 文化的考察

「できる限り異文化理解に役立つ絵本を選択する」ということが当初から学生に与えられた条件であったが、その際 1)子どもの異文化理解に役立つ絵本 2)学生自身の異文化理解に役立つ絵本、のいずれに該当するかを意識しつつ選択することが求められた。また、英語の原作と日本語の創作訳との対照分析を通して日英語の思考法や発想の相違を見出す作業も課された。

1) 子どもの異文化理解に役立つ絵本

主として子どもの異文化理解に役立つものとしては外国の生活や風習に触れたものや、それらを題材にしたものが挙げられた。異文化理解教材としての利用価値があるとされたのは、世界各地の「昼食」を紹介した絵本 *This Is The Way We Eat Our Lunch*(B.Edith)、フランスの寄宿制ミッションスクールで暮らす主人公マデライン達がロンドンへ旅をしてイギリスの文化に触れる様子を描いた *Madeline in London*(L.Bemelmans)、自分の部屋から街・郡・州・国・大陸・地球・太陽系・銀河系へと視野を拡大し、銀河からまた自分の部屋に少女の思いが戻ってくることを描いた *From Here To There*(M.Cuyler)、二人のアメリカ人姉弟がピアノレッスンをさぼって日本に旅行し、日本文化に触れて驚く様子を描いた、*Sayonara*

Mrs. Kackleman, (M. Kalman)その他が挙げられた。とりわけ最後の作品には「日本的文物へのステレオタイプな理解・中国や他のアジアの風習と日本の風習との混同・現代日本と過去の日本との混同」などが見られ、異文化理解の難しさを考えさせる好材料になるとの感想が出された。

一方、ほとんど写真のみで構成されているために英語教材には向かないが子どもの異文化理解には多いに役立つと好評であったのが、黒人・白人・東洋人その他の人種の赤ちゃんの表情をクローズアップした *Baby Messy, Baby Clean*, (N. Sheehan)である。食べ物・泥・絵の具で顔や体をべたべたに汚して喜ぶ表情、風呂場で泡だらけになり顔をくしゃくしゃにして泣いている表情などはいずれも愛らしさに満ちている。世界には様々な人種の子どもが存在するという、しかし本質的に人間としての魅力や価値は変わらないという肯定的メッセージが理屈抜きに伝わる好著であり、1～2歳児にも訴える魅力を持つとの意見が出された。

2) 学生自身の異文化理解に役立つ絵本

学生達に強い印象を与えたのはアメリカの離婚家庭の姿を描いた *My Mother's House, My Father's House* (C. B. Christiansen)である。両親の離婚により週日を母親の家で、週末を父親のマンションで過ごす少女の生活が本人の眼から淡々と語られている。どちらの家にも愛着のある物に囲まれた自分の部屋があり、愛情豊かな母または父とのきちんとした暮らしがあるのだが両親が互いの家に入ることは決してない。絵本の中の大人には言葉はあるが顔が出てこない。「大きくなったら両方の家に置いてある自分の大切な物が全部入る家に住みたい」という少女の言葉の中の「自分の大切な物」を「母と父」に置き換えることで少女の真意が見えてくると言える。

アメリカでは離婚が極めて日常的であること、離婚した両親の家を子どもが定期的に往復するという生活形態に契約型社会の一面が反映していること、子どもの心の現実を捉えるにはこのような題材も必要であること等が教室で話し合われたが、この絵本を日本の幼稚園児に読ませたいかという点に関しては賛否両論が出された。

3) 日英語の文化比較

学生の訳文は概ねかなり自然な日本語となっている。「子どもの感性に訴える生き生きとした日本語で、原文の『言葉』よりも『気持ち』に忠実な創作翻訳を作る」という課題の趣旨が理解されていたためと思われる。完成した創作翻訳をあらためて原

文と比較させ、日英語の発想や思考法の違いにも注目させた。

原文と創作翻訳との一種の「コミュニケーションパターン」の違いが指摘されたのは *Mr. Rabbit And The Lovely Present* (C.Zolotow)である。森の中で少女がウサギと出会い、ウサギに相談しつつ母親の誕生日プレゼントを探しにでかけるというストーリーだが、少女とウサギのやりとりが、言うならば、原文では「2拍子」訳文では「3拍子」で展開されているのだ。母親へのプレゼントを何にするか二人が相談し合う場面を以下に引用してみたい。

“What is red?” said the little girl.

“Well” said Mr. Rabbit, “there’s red underwear” (提案)

“No,” said the little girl, “I can’t give her that” (拒否)

“There’s red roofs,” said Mr. Rabbit. (提案)

“No, we have a roof,” said the little girl, “I don’t want to give her that.” (拒否)

“There are red birds,” said Mr. Rabbit, “red cardinals.” (提案)

“No,” said the little girl, “She likes birds in trees.” (拒否)

「だけど、赤いものって何かしら？」

「うーん、あ、赤い下着はどう？」 (提案)

「だめよ。そんなお母さんにあげたくないわ。」 (拒否)

「そっか。」 (了解)

「あっ、見て。赤い屋根があるよ！」 (提案)

「だめよ。私の家に屋根はあるもの。」 (拒否)

「そっか。」 (了解)

「あっ、見て。赤い鳥がいるよ！」 (提案)

「だめよ、お母さんはきっと鳥なんて飼いたくないんだもの。」 (拒否)

「そっか。」 (了解)

英文では「提案—拒否」の2拍子が繰り返されて対話が進むのに対し、日本語訳では「提案—拒否—了解」の3拍子構成となっている。「そっか」という了解の言葉は意見衝突の緊張を回避させようとする日本的な配慮の表れとも思われる。また、これらのやりとりは絵本の基調となって形を変えつつ何度も繰り返されるパターンであり、「そっか」は日本語訳にリズムを与える役割をも果たしている。

さらに、この直前に現れているやりとりが極めて興味深い。

“She likes red,” said the little girl.

“Red,” said Mr. Rabbit, “You can’t give her red.”

“Something red, maybe,” said the little girl.

“Oh, something red,” said Mr. Rabbit.

「うーん、そういえば赤が好きだわ。」

「そっか、でも赤はあげられないよ。」

「何か赤いものにすればいいのよ。」

「うん、そうしよう。」

他の箇所でも「でも黄色はあげられないよ」「何か黄色いものにすればいいのよ。」「でも緑はあげられないよ。」「何か緑色のものにすればいいのよ。」「でも青はあげられないよ。」「何か青いものにすればいいのよ。」という類似のやりとりが繰り返されるのだが、このやりとりは考えると実に哲学的である。つまり色彩というものが実体ではなく属性であり、色彩そのものを取り出すことはできないということを指摘しているのだ。ウサギの哲学的な問題提起を幼い少女はすんなりと受け入れて解決する。ここに西洋の哲学的伝統が垣間見えると評することも可能であろうし、「子どもはみな哲学者である」という筆者のメッセージを読み取ることもできそうだ。

日英語を通してみる発想の比較という点では既述の *Sayonara, Mrs. Kackleman* の題名が妙だと話題となった。絵本の内容から判断すると「さよなら」ではなく「行ってきます」としなくてはならないという指摘である。Good by の誤訳と言えるかもしれない。また、日本語で「すし詰め」と形容される満員電車が英語では “marshmallows all stuffed together” と表現されるなど、日英語の比喩の違いも指摘されたが、「寿司」より「マシュマロ」の方が満員電車のイメージに合うという意見も出された。

6. 創作翻訳指導の統合的性格

英語絵本の創作翻訳導入によって英語の読解と翻訳・日英語の対照的理解・異文化理解・学生の専門的関心などを統合的に扱い、英語授業の活性化をはかることが筆者の意図であったが、それぞれの分野と絵本の創作翻訳作業がどのような連関性を持ち得たかについて考えてみたい。

1) 翻訳技法と翻訳指導

創作翻訳の導入においては、加島祥三・志村正雄(『翻訳再入門』1992)の「意味のストレス(強調)」及び同書で紹介されたロバート・ブライの「翻訳の8段階」という概

念に負う所が多い。

① 翻訳の 8 段階

1. A 言語から B 言語へ一語一語写し替える
2. 文化的情報・特殊な情報の確認。差が激しい時は翻訳自体を断念すべき
3. A 言語よりも B 言語に忠実に表現する
4. 生きた口語の性質を入れる
5. 詩のムードを考え、感情を見る
6. 音に注意する。音のエネルギーの一つは耳の中に、もう一つは筋肉システムの中にある。(ボディ・リズム)
7. 言語の母語話者からの点検を受ける
8. 他者の翻訳があれば、その訳し方を調べる

文化差が激しい場合には翻訳自体を断念すべきであること、英語を日本語に翻訳する場合には英語よりも日本語により忠実であること、また「感情を見る」という指摘も重要である。しかし、とりわけ「ボディ・リズム」という概念に筆者は強い印象を覚えた。言語の音のエネルギーは、いわば、我々の筋肉の一部となっており、訳語を作り出す際にもそのリズムに耳を傾けねばならないという指摘である。外国語を学んでいる者にとって言語の奥深さと同時に言語学習の難しさを思い知らされる意見でもある。

② 意味のストレス (強調・真意)

さらに、加島氏の指摘する「意味のストレス」という概念が興味深い。以下に氏の主張の要点を挙げてみる。

- ・ 後戻りせずに読める翻訳。S と V を分離させない
- ・ 原文の語順などは気にせず、原文の意味のストレス (真意) を気にすべきだ
- ・ 翻訳の第一歩は原文の文章の音が聞こえてくること、そして一番強い音がどれかを感じられること
- ・ 意味のストレスのはっきりした文章には、やがてリズムが生じ、「声」につながる。決まり文句ではなく、個人の声として聞こえてくるという点で、一つの文体になる。

英語の読解力そのものに不安のある短大生に高度な翻訳技術を期待することは困難であるが、「子どもの感性に訴える生き活きとした日本語で、原文の『言葉』よりも『気持ち』に忠実な創作翻訳を作る」という課題を与えて筆者が意図したものも、原文の

「意味のストレス」をつかんで学生自身の「ボディ・リズム」で表現させることであつたように思う。

2) 日英語の対照と異文化理解

翻訳後の分析においては学生自身の日本語のボディ・リズムで書かれた翻訳が、英語のボディ・リズムで書かれた原作とどのように異なっているかを客観的に認識させることも授業の狙いであつた。言語が文化の体现であり、日英語には統語上の相違だけではなく、視点や発想という認知的・価値観的相違も存在するという事実気付かせることが目的である。機械的操作で拾い出した文例の中から、学生が興味深い事実突き当たることも多く、創作翻訳には「ことばと認識の関係」についての体験学習的側面があつたように思われる。

日英語の比較という観点を超えて、英語絵本の創作翻訳が学生を対象とした異文化理解指導にどの程度の有効性を持ちうるかは、選択される絵本の内容、及び指導者の異文化理解に関する知識に依存する部分も大きい。また絵本には、異文化の風習に関する知的情報源としての役割以上に異文化への親近感を高める一種の「感性的刺激」としての役割や、イメージ喚起力にこそ期待すべきであると思われる。時に意識を超えて人の無意識にも働きかけうる絵本の、異文化理解教材としての活用価値は大きい。

3) 保育系学生の専門性との関連づけ

早期英語教育や子供のための国際理解教育が幼児教育の今日的な焦点のひとつとなっている中で、それらの要望にどう備え応えてゆくべきか、保育系学生の問題意識も高まりつつある。絵本の創作翻訳が学生の専門性との関連で持つ大きな意義としては、保育現場での異文化理解教材としての応用価値を持ちうる点だ。原作の英語絵本や自作の翻訳を教育実習での教材として活用した学生達もいる。幼児教育祭での「読み聞かせ」や展示などの発表の機会を経て英語絵本を完読したことへの手応えを感じた学生も多い。

授業が学生の現実的関心とつながるところに授業活性化の鍵があるように思われる。

7. 結論

短期大学の英語 reading 授業における英語絵本の創作翻訳を通して、保育系学生のための翻訳指導・日英語の対照言語学的学習・異文化理解学習を統合的に扱い、英語

学習への動機付けを高める試みを本稿では取り上げた。英語絵本の創作翻訳は、学生の主体的で能動的な教材選択、具体的な目標設定、創造性の発揮と客観的な分析、学生自身の専門性との関連付けなどを通して英語教材を学生の 'realities' に結び付ける英語読解指導法としての一定の有効性を持ちえたものと思われる。

注

1. 本研究は文部科学省の大学教育高度化推進特別経費による研究費補助、及び岡崎女子短期大学課題研究助成を受けている。また、本稿は2002年6月の大学英語教育学会中部支部大会（金城学院大学）および第13回 AILA（国際応用言語学会）シンガポール大会での口頭発表をまとめたものである。
2. ここでの「創作翻訳」とは、いわゆる直訳や意識の範囲を超えて、学生自身が独自の解釈や表現を通して、原作の英語絵本を新しい日本語絵本へと作りなおす作業を意味している。
3. authentic reading とは単にテキストの内容を正確に把握することを指すのではなく、学習者がテキストと主体的に関わり「自分の読み」を作ってゆくことである、とする Dr. Widdowson の主張は極めて示唆的である。
4. 授業内での基礎的な異文化理解指導には、補助資料を用いて人間関係や自然との関係などの文化比較を行ない、レポートを課すことなどが含まれる。

参考文献

- Baer, Edith (1995). *This Is The Way We Eat Our Lunch*. Scholastic.
- Burningham, John (1978). *Mr. Gumpy's Outing*. Penguin.
- Christiansen, C.B. (1989). *My Mother's House, My Father's House*. Puffin Books.
- Cooper, Susan (1986). *THE SELKIE GIRL*. Macmillan.
- Couric, Katie (2000) *The Brand New Kid*. Doubleday.
- Cuyler, Margery (1999). *From Here To There*. Henry Holt and Company.
- Dodds, Siobhan (1993). *Grandpa Bud*. Candlewick Press.
- Hoban, Lillian (1972). *Arthur's Christmas Cookies*. Harper & Row.
- Iviney, John.W. (1980). *THREE BLIND MICE*. Brown and Company.
- 金谷武洋. (2002). 『日本語に主語はいらない』. 講談社.

加島祥三、志村正雄.(1992).『翻訳再入門』. 南雲堂.

Kalman, Maila. (1989). *Sayonara Mrs. Kackleman*. Viking Penguin.

中右 実 編.(1997).『文化と発想とレトリック』. 研究社出版.

Rey, H.A.(1941). *Curious George*. Houghton Mifflin Company.

Ungerer,Tomi.(1961) *THE 3 ROBBERS*. Methuen.

Zolotow,Charlotte. (1962). *MR.RABBIT and the LOVELY PRESENT*. Puffin Books.